（表題をこちらに入力してください）

サービス　太郎1\*, サービス　次郎2, サービス　三郎2

1 サービス学会 サービス事業部

2 サービス大学 サービス研究所

\* Corresponding Author: author@serviceology.ac.jp

**概要**

〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○〇〇○（200字程度）

# はじめに

# 実践内容

2章内の節項目は自由とする．ただし，以下の構造を推奨する．

## 取り組み概要

## 至った背景・経緯

## 特徴・工夫した点

## 詳細内容

# 事前に期待した効果

# 実際に得られた効果／結果

# ディスカッション

今回の実践を通じて分かったことを議論する（形式自由）

# おわりに

# 参考文献

# 以下は執筆要領です．投稿時には削除してください

このテンプレートの表題，著者名，本文などはあらかじめ本会指定のフォントサイズなどの書式が設定されている．この書式を崩さずに入力すれば，定められた体裁で実践レポートを作成することができる．

原稿1編当たりのページ数は，6ページまでとする．また，編集委員が特に必要と認めた原稿については超過を認めることがある．本文の記述はできるだけ簡潔・的確に整理することが望ましい．また，原稿にページ番号を挿入しないこと．

### ページ設定

余白は，上20mm，下18mm，左右17mmとする．

### タイトルと著者情報

タイトルは，ゴシック体・Arial 16 point 太字とする．著者名は明朝体・Serif系（Century，Times New Romanなど）12 point 標準，所属は明朝体・Serif系で10 pointとする．

### 概要

本文の前に概要を載せる．200字程度として

### 本文

本文は2段組とし，段の幅を85mmとする．フォントは，明朝体・Serif系（Century，Times New Romanなど）10 point 標準とし，最初の行は1字字下げする．また，文章の区切りには全角の読点「，」（カンマ）と句点「．」（ピリオド）を用いる．

### 見出し（章，節，項）

見出しの体裁は，表1に示す通りである．また，見出しがページの最後の行にならないようにする．

本文中では，表1のように日本語で書く．キャプションは，表の上に記載し，フォントは，明朝体・Serif系（Century，Times New Romanなど）で10 point中央揃えとする．

### 図

本文中では，図1のように日本語で書く．写真は，図として扱う．キャプションは，図の下に記載し，フォントは，明朝体・Serif系（Century，Times New Romanなど）で10 point中央揃えとする．

図1　図題の例

引用した文献は，以下の書式に従い，英文誌・洋書の場合はアルファベット順，和文誌・和書の場合は50音順で本文末尾にまとめて記載し，本文中では（Vargo and Lusch 2004）のように参照する．フォントは，明朝体・Serif系（Century，Times New Romanなど）8 point 標準とする．

### 参考文献の書式

 (論文の場合)

著者名 (発行年). タイトル. 雑誌名, 巻(号), 開始ページ-終了ページ.

(書籍の場合)

著者名 (発行年). タイトル. 書籍名, 出版社, 開始ページ-終了ページ.

(Webサイトの場合)

WEB所有者名 (発行年). 記事タイトル(無い場合は省略). URL, last

accessed on Month. Day, Year.

### 参考文献の著者名の書式

英語文献の場合， 著者はFamily name, First nameの頭文字の形式で記載する．著者が複数名の場合，著者名間はカンマで区切り，最終著者はandで接続する．日本語文献の場合，姓名の間に空白を空けず，姓名の順で記載し，著者名間はカンマで区切る．

### 参考文献の記載例

Vargo, S. L., and Lusch, R. F. (2004). Evolving to a new dominant logic for marketing. Journal of marketing, 68(1), 1-17.

Lusch, R. F., and Vargo, S. L. (2014). Service-Dominant Logic: Premises, Perspectives, Possibilities. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Society of Serviceology (2018). About Society for Serviceology. http://www.serviceology.org/introduction/index.html, accessed on 6.22, 2018.

白肌邦夫, ホーバック (2018). ウェルビーイング志向の価値共創とその分析視点. サービソロジー論文誌, 1(1), 1-9.

村上輝康, 新井民夫, JST社会技術研究開発センター (2017). サービソロジーへの招待 価値共創によるサービス・イノベーション, 東京大学出版会, 143-161.

サービス学会 (2018). サービス学会について. http://ja.serviceology.org/introduction/index.html, accessed on 6.22, 2018.

表1　表題の例

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | **章** | **節** | * + 1. *項*
 |
| フォント | ゴシック体Arial 10 point | ゴシック体Arial 10 point | ゴシック体Arial 10 point |
| スタイル | **太字** | **太字** | *斜体* |
| 番号 | 1, 2, 3, .... | 1.1, 1.2, 1.3, ... | なし |
| 間隔 | 段落前 1行段落後 3 points | 段落前 3 points段落後 3 points | 段落前 3 points段落後 3 points |